

# JAPAN/ICOMOS INFORMATION

第2期 第10号

平成7年(1995年)5月1日発行

## もくじ

• はじめに .....	1
• 1993年日本イコモス国内委員会総会報告 .....	1-4
(1994年1月22日開催) <資料・93-I~III> .....	5-7
• 1994年日本イコモス国内委員会総会報告 .....	8-11
(1995年3月11日開催) <資料・94-I~VI> .....	12-19
• 1994年第一回理事会報告(1994年7月11日開催) .....	20
• 1994年第二回理事会報告(1995年2月18日開催) .....	21
• 事務局よりのお知らせ .....	21
• 日本イコモス国内委員会1995年会員名簿 .....	22-24

# JAPAN/ICOMOS INFORMATION

第 2 期 第 1 0 号

1995年(平成7年)5月1日発行

## はじめに

会員の皆様には平素より日本イコモス国内委員会の活動と運営にご協力頂きありがとうございます。特に1994年は、3/7-12の「イコモス木造文化財保存特別国際委員会(木の委員会)国際会議」、11/1-6の「オーセンティシティ奈良国際会議ー世界文化遺産奈良コンファレンス」、11/6-10の「国際イコモス諮問・執行委員会」等の国際会議が日本で開催され、会員の皆様には多大のご協力を頂き、深く感謝申し上げます。また、<INFORMATION>の発行がこの間滞り、皆様にご迷惑をおかけ致しました事をお詫び致します。今後はできるだけ多くの情報をお届け致したいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

\* \* \* \* \*

1993年

## 日本イコモス国内委員会総会

日 時： 1994年 1月22日(土) 1:30~4:30

場 所： 財団法人早稲田奉仕園スコットホール2階会議室(223号室)

出席者： 坪井委員長、稲垣副委員長、伊藤延男、羽生修二、益田兼房  
渡辺勝彦、渡辺保弘の各理事

上野邦一、佐々波秀彦、田中 琢、渡辺保忠の各委員(以上50音順)

出席者11名 委任状提出者57名 会員総数は125名(1994年1月22日現在)で、委任状を含む出席者は過半数を超え、総会が成立した。  
(担当：渡辺保弘理事)

## 議 事

### I 報告事項

1) 1993年活動報告

a)事業報告（担当：稲垣栄三理事）

- ①93/ 2/8 ハギア・ソフィア大聖堂学術調査報告会（後援・於建築会館ホール）  
当国内員会の飯田喜四郎氏、日高健一郎氏が報告された。
- ② 5/24 第一回研究会開催（於・文化庁会議室）  
「カナダの遺産保存－国際的な保存原則との関わり」  
イコモス事務局長 ハーブ・ストーベル氏
- ③ 10/22 特別講演会（古文化財保存科学会と共催・於東京国立博物館大講堂）  
「アンコール遺跡保存における技術的諸問題」 伊藤延男氏  
12/2-3 伊藤延男理事イコモス諮問委員会（パリ本部）に出席
- ④ 12/13 社団法人東京倶楽部より文化活動助成金が交付される。（木の委員会日本大会実行費として）
- ⑤ 12/15 パリのイコモス本部に NEWS LETTERの出版援助費を送る。
- ⑥ 12/17 第二回研究会開催（於・学士会館）  
「オーセンティシティの解釈をめぐる最近の動向」 益田兼房氏

b)イコモス総会（第10回大会 於スリランカ・コロンボ）関係

- ①93/ 4/15 「イコモス第10回総会にアジア諸国の人々の出席費用援助のための募金」のお願いを国内委員会会員に送付
- ② 5/ 8 文化財保護振興財団に助成金申請
- ③ 6/30 イコモス総会本部に役員改選のvoting list および委任状を発送
- ④ 7/ 6 アジア諸国からの大会参加者への渡航費用援助として 1,657,000円をスリランカ大会本部に送金
- ⑤ 7/20 文化財保護振興財団より大会発表者のために 1,410,000円が交付される。
- ⑥ 7/30-8/7 第10回イコモス大会に下記の諸氏が出席（順不同・敬称略）  
坪井清足、伊藤延男、西村幸夫、益田兼房、渡辺定夫、中村 一  
西浦忠輝、上野邦一、牛川喜幸 以上9名
- ⑦ 8/11 募金のお礼および会計報告（募金合計 990,000円）を会員に送付
- ⑧ 10/30 大会参加者の報告書配布（JAPAN ICOMOS UNIFORMATION 第2期9号に掲載）

c)庶務報告（担当：渡辺保弘理事）

- ①93/ 2/ 8 1992年日本イコモス国内委員会総会開催（於・早稲田奉仕園）
- ② 5/26 パリ本部へ1993年分会費(126名分)を送金
- ③ 8/ 4 文化活動助成金交付申請書を作成し、社団法人東京倶楽部へ提出
- ④ 8/11 1993年国内委員会93年分会費請求発送
- ⑤ 9/10 第一回理事会開催（於・学士会館）
- ⑥ 10/30 JAPAN ICOMOS INFORMATION 第2期9号発行
- ⑦ 10/30 『世界の遺産マップ』（ユネスコ発行）を全会員に配布

- ⑧ 12/ 1 1993年国内委員会会費請求（2回目）
- ⑨ 12/18 第二回理事会開催（於・文化財工学研究所）

2) 会員推移状況（担当：渡辺保弘理事）

<入 会>	なし		
<退 会>	2名	岩下敏也氏	・ 沢村 仁氏
<逝 去>	1名	土田直鎮氏	

以上によって1993年の会員数は 126名

3) 会費納入状況（担当：石井 昭理事）

1993年 1月22日現在の会費納入状況は<資料93-I>の通り。

4) 会計報告（担当：渡辺保弘理事）

1993年 1月22日現在、一般会計残高 3,598,504円、基金合計12,550,000円  
詳細は<資料93-II>の通りで承認された。

5) 会計監査報告（担当：上野邦一委員）

監事欠席のため上野邦一委員が代理で監査の結果報告

## II 審議事項

1) 1994年の活動計画（担当：稲垣栄三理事）

本年は下記の3つの国際会議が予定されているため、夫々担当者より参考資料にしたがって説明され、質疑応答の上承認された。

- ①イコモス木造文化財保存特別国際委員会（木の委員会）国際会議  
1994年3/7-12 於・関西 担当：伊藤延男理事
- ②オーセンシティシティ奈良国際会議（共催）  
1994年11/1-6 於・奈良 担当：益田兼房理事
- ③主として上記関係の研究会 担当：稲垣栄三理事
- ④イコモス諮問・執行委員会  
1994年11/6-10 於・奈良 担当：伊藤延男理事

## 2) 入会及び退会の件 (担当: 渡辺保弘理事)

### ① <入会申込者> 3名

杉尾伸太郎氏 株式会社ブレック研究所代表取締役 坪井委員長・益田兼房理事  
吉田 鋼市氏 横浜国立大学工学部助教授 坪井委員長・稲垣副委員長  
藤井 恵介氏 東京大学工学部助教授 坪井委員長・稲垣副委員長

### ② <退会希望者> 4名

河野 靖氏 伊藤鄭爾氏 新田栄治氏 金多 潔氏

### ③ 会員数

今総会時(1993年)会員数は126名であったため、上記の入退会が承認去れ、1994年の会員数は125名となる。

## 3) 予算計画について

1994年の予算計画については、<資料93-Ⅲ>に従って渡辺保弘担当理事より説明があり、承認された。

## 4) その他

- ・従来の会員記録(入会時に提出されたもの)は内容的にも古くなっているものもあり、情報記載欄が少ないため、記録用紙の内容を改善し、全会員に現在の状況の提供を依頼する。
- ・団体会員の入会と活動参加が望ましいので、受入れの準備をする。

以上の事が討議され、実行に移すことが承認された。

以 上

会費納入状況

1994年 1月12日現在

	名誉会員数	会 員 数	納入者数	未納者数	(免除)
1979年分		20	20	0	0
80年分		20	20	0	0
81年分		34	34	0	0
82年分		34	33	0	1
83年分		34	33	0	1
84年分		33	33	0	0
85年分		46	46	0	0
86年分		47	46	1	0
87年分	4	42	40	1	1
88年分	4	41	39	1	1
89年分	4	93	88	5	0
90年分	4	119	113	6	0
91年分	3	121	113	8	0
92年分	3	126	106	20	0
93年分	3	123	87	36	0
94年分前納	・	・・・	4	・・	・

\*93年会費納入分：91年分 8名・92年分15名・93年分81名・94年分 4名

以上の通り報告致します。

1994年 1月22日

会計担当・石井 昭  
渡辺保弘

繰越金

普通預金(口座1)	1,026,394 円
普通預金(口座2)	1,321,499 円
小 計	2,347,893 円

収 入

会費収入	1,080,000 円
(91年 8名80,000・92年15名 150,000・93年分81名810,000・94年 4名40,000)	
普通預金利息	5,433 円
自由金利利息	421,680 円
募 金	990,000 円
預り金(文化財保護振興財団助成金)	1,410,000 円
寄 付	300,000 円
助成金(社団法人東京倶楽部)	2,650,000 円
雑収入	5,510 円
小 計	6,862,623 円

収入合計 9,210,516 円

支 出

パリ本部への送金(93年分)	312,784 円
大会援助費(15,000USドル)	1,657,000 円
大会発表者預り金(470,00×3名)	1,410,000 円
大会参加者渡航援助費(105,000×7名)	735,000 円
上記振込料	4,738 円
広報担当事務費	95,800 円
総会・理事会費用	24,283 円
研究会費用	6,200 円
世界の遺産マップ	33,400 円
NEWS LETTERのための送金(含手数料)	1,106,000 円
事務局費	226,807 円

支出合計 5,612,012 円

残 高

普通預金(口座1)	450,562 円
普通預金(口座2)	497,942 円
「木の委員会」口座	2,650,000 円

残高合計 3,598,504 円

基 金

イコモス研究振興基金 12,550,000 円 12,550,000 円

以上の通り報告します。

1994年 1月22日

会計担当 石井 昭

渡辺保弘

監査の結果

妥当に認めず。

川野 邦一

会員数 124名(予定)

1992年繰越金	普通預金(口座1)繰越	450,562 円
	普通預金(口座2)繰越	497,942 円
	「木の委員会」口座	2,650,000 円
	小計	a) 3,598,504 円

収入	会費 1994年分	1,240,000 円
	未納分徴収	780,000 円
	利息 定期預金(基金)	300,000 円
	普通預金	3,000 円
	小計	b) 2,323,000 円

合計 a) + b) 5,921,504 円

支出	会費 ICOMOS本部宛	300,000 円
	総会会場費	20,000 円
	理事会会場費	20,000 円
	研究会会場費	30,000 円
	広報担当経費	200,000 円
	会計・庶務担当経費	250,000 円
	木の委員会国内視察・シンポジウム運営費	2,650,000 円
	イコモス諮問委員会国内開催費	300,000 円
	イコモス地域別ミニ総会開催費	450,000 円

合計 4,220,000 円

残高

繰越金+収入-支出 1,701,504 円

活動計画(概略)

総会開催	1回
理事会開催	5回
研究会開催	5回
インフォメーション発行	2回



1994年

## 日本イコモス国内委員会総会

日 時：1995年 3月11日（土）午後1:00～4:00

場 所：学士会館（神田一つ橋）203 号室

出席者：坪井清足委員長、稲垣栄三副委員長、（以下各50音順）伊藤延男、  
石井昭、加藤晋平、木原啓吉、益田兼房、渡辺保弘の各理事、  
岸本雅敏、関口欣也の各委員

出席者10名 委任状提出者66名 委員総数は 125名（1995年 3月11日現在）  
で、委任状を含む出席者は過半数を超え、総会は成立（担当：渡辺保弘理事）

### 議 事

#### I 報告事項

##### 1) 1994年活動報告

###### a) 事業報告（担当：稲垣理事）

- ①94/ 2/16 News Letter（パリ本部発行）に坪井清足委員長の「日本における観光旅行と公園の歴史」を寄稿、1994/4月号に掲載される。  
<資料94-I>
- ② 3/7-12 イコモス木造文化財保存特別国際委員会（木の委員会）国際会議を関西地区にて開催（木の委員会発行の報告書より英文のResolution他添附<資料94-II>）
- ③ 7/25 「ヴェニス憲章」の日本イコモス国内委員会1994年改訂訳作成（先にお送りした『月刊文化財』のP.35をご参照下さい）
- ④ 11/1-6 オーセンティシテイ奈良国際会議-世界文化遺産コンファレンス-開催（国内委員会協力・於奈良）、資料として『月刊文化財』2月号を会員諸氏に配布（95/3月）
- ⑤ 11/6-10 国際イコモス諮問・執行委員会開催（於奈良国立文化財研究所）  
（ICOMOS NEWS LETTERのP.29をご参照下さい）  
ICOMOS会長のR. シルヴァ氏より日本イコモス国内委員会（坪井清足委員長宛）へのお礼状添付<資料94-III>

###### b) 研究会活動（担当：稲垣理事）

- ①94/2/19 第一回（於・学士会館 参加者17名）  
「ノールウェイでの準備会合-1994/1/31-2/2-における協議の結果報告」  
益田兼房氏

- ② 4/ 2 第二回（於・国立教育会館 参加者16名）  
「民族文化財の保存と修理」 文化庁調査官 神野善治氏  
「絵画の保存と修理」 " 宮島新一氏
- ③ 5/28 第三回（於・国立教育会館 参加者22名）  
「町並み保存におけるオーセンティシティー日本・アジア・欧米」  
西村幸夫氏
- ④ 6/11 第四回（於・国立教育会館 参加者23名）  
「日本の文化財建造物の保存修理とオーセンティシティ」  
文化庁建造物課 稲葉信子氏  
「世界遺産とオーセンティシティ」 益田兼房氏
- ⑤ 6/20 第五回（於・国立教育会館 参加者25名）  
「アジアから見たオーセンティシティの諸問題」 伊藤延男氏
- ⑥ 6/25 第六回（於・国立教育会館 参加者24名）  
「環境とオーセンティシティ」 鈴木博之氏  
「庭園・風土とオーセンティシティ」 近藤公夫氏
- ⑦ 11/26 第七回（於・国立教育会館 参加者16名）  
「ポーランドの世界遺産の推薦・保護・管理について  
ーアウシュビッツ・ワルシャワの町並みー」  
元イクロム会長 アイゼン・トマゼウスキ氏
- ⑧ 12/ 3 第八回（於・国立教育会館 参加者21名）  
「[世界文化遺産奈良コンファレンス]を終えて」  
司会 益田兼房氏

c) 庶務報告（担当：渡辺<sup>保弘</sup>理事）

- ①94/1/22 1994年日本イコモス国内委員会総会開催（於・財団法人早稲田奉仕園会議室）
- 4/ 8 1994年国内委員会会費納入請求書発送
- 4/ 8 国内委員会ミニインフォメーション発行
- 7/11 94年第一回理事会開催（於・学士会館）
- 7/25 ヴェニス憲章の国内委員会訳の特別打合せ会開催（於・伊藤氏宅）
- 8/12 日本イコモス国内委員会1994年改訂訳「ヴェニス憲章」をパリ本部  
に送付
- 8/19 1994年分会費（125名分）をパリ本部に送金
- 11/18 1994年国内委員会会費請求（2回目）
- 95/2/18 94年第二回理事会開催（於・事務局 株式会社文化財工学研究所内）

2) 会員推移状況（担当：渡辺<sup>保弘</sup>理事）

1992年の会員数 129名、1993年入会者 0名、退会者 2名、逝去 1名にて総会  
時の会員数は 126名。

<入会> 1993年総会承認に基づく1994年入会の新規会員は以下の3名

(推薦者)

杉尾伸太郎氏	株式会社ブレック研究所代表取締役社長	坪井委員長・益田兼房理事
吉田 鋼市氏	横浜国立大学工学部助教授	坪井委員長・稲垣副委員長
藤井 恵介氏	東京大学工学部助教授	坪井委員長・稲垣副委員長

<退会> 1993年総会承認に基づく1994年退会の会員は下記の4名

河野 靖氏 ・ 伊藤鄭爾氏 ・ 新田栄治氏 ・ 金田 潔氏

<逝去> 山本雅治氏

◎上記の結果1994年の会員数は125名となる。

3) 会費納入状況(担当:石井理事・渡辺<sup>保弘</sup>理事)

1994年3月11日現在の会費納入状況は<資料94-IV>の通り。

4) 会計報告(担当:石井理事・渡辺<sup>保弘</sup>理事)

1994年3月11日現在、一般会計残高1,210,659円、基金合計12,550,000円  
詳細は<資料94-V>の通りで承認された。

5) 会計監査報告(担当:岸本雅敏委員)

監事欠席のため岸本雅敏委員が代理で監査、承認報告

## II 審議事項

1) 1995年の活動計画(担当:稲垣副委員長)

ー研究活動等の計画についてー

- ・ 昨年(94年)の3月の「イコモス木造文化財保存特別国際委員会(木の委員会国際会議)(於・関西)や11月の「オーセンティシティ奈良国際会議ー世界文化遺産奈良コンファレンス」は、Authenticityの観点から文化の多様性が論じられ、日本の文化財の保存が世界に理解される好機となった。
- ・ 日本イコモス国内委員会では、引き続き日本の文化財の保存および修理方法を国外に紹介していく努力を計り、年間活動を進めていく。また、近年海外での遺跡の修復事業に多くの日本の専門家達が関係を持つようになって来たが、それらの専門家の方々の情報交換、更にはそれら遺跡修復に対してのガイドラインの作製等を念頭に置いた研究会を開催する予定。

2) Diaster Hazard Preparedness について (担当: 伊藤延男理事)

パリ本部発行の ICOMOS NEWS (94/7月・12月発行分) に ICOMOS RISK PREPARERDNESS SCHEMEとして紹介されている世界遺産の危機管理について、事態の推移に対応できる組織を国内委員会内部に作る事、また、一般のボランティアに出来る事と、専門家の果たすべき役割や範囲等について話し合われた。今後引き続き審議することになった。

3) 入会及び退会の件 (担当: 木原啓吉理事)

① <入会申込者> 4名

(推薦者)

本中 眞氏	文化庁文化財保護部記念物課	田中 琢委員・安原啓示委員
田中哲雄氏	文化庁文化財保護部記念物課	田中 琢委員・安原啓示委員
片方信也氏	京都大学工学部助手	高橋康夫委員・A・グルシェフスキ
吉田正二氏	国際連合地域開発センター	上野邦一委員・宗田好史委員

② <退会希望者及びご逝去> 3名

退会 金子裕之氏 ・ 村松貞次郎氏

逝去 天田起雄氏 (1994/9/8)

③ 会員数

今総会時(1994年)の会員数は125名であったため、上記の入退会が承認され、1995年の会員数は126名となる。

4) 役員改選の件

連続3期にわたって委員長の任にあった坪井清足氏より辞意が表明され、次期委員長として石井昭氏(東京都立大学工学部教授)が選出された。他の役員(副委員長・理事・監事)の改選、新旧役員交替時期の決定等については、理事会の審議に委ね、次回総会(1995年総会)において追認することとなった。

5) 予算計画について

1995年の予算計画については、<資料94-VI>のように渡辺<sup>保弘</sup>担当理事より説明があり、承認された。

以 上

## HISTORIQUE DES PARCS ET DU TOURISME AU JAPON

Certains documents historiques japonais révèlent qu'à la fin du VI<sup>ème</sup> siècle (plus précisément en 596), le Prince Shotoku (qui était Sessho, c'est à dire Régent) est allé jusqu'à parcourir plus de 500 kilomètres à partir de Nara pour profiter d'une source d'eau chaude. Sur les lieux, aujourd'hui les thermes de Dhogo de la Préfecture d'Ehime, il a fait construire un monument en pierre. De telles informations indiquent bien que les Japonais affectionnent les sources d'eau chaude depuis des siècles. Mais au Japon il existe une multitude d'endroits réputés pour leurs cerisiers en fleurs au début du printemps et pour les couleurs chatoyantes des érables en automne. Man'yoshu, la plus ancienne anthologie de la littérature japonaise, fait référence à un grand nombre de ces sites célèbres. Depuis la publication de cette anthologie au VIII<sup>ème</sup> siècle, ces sites ont fait l'objet de «Waka», forme traditionnelle de poésie japonaise constituée à partir de 31 syllabes et transmise de génération en génération. Aujourd'hui, ces sites sont connus sous le nom de «nadokoro» (site touristique connu) des «utamakura» (lieux célèbres souvent cités dans la poésie Waka). Par la suite, il fut publié au Moyen-Age le «Meisho-ki», guide d'excursion à l'usage des poètes Waka expliquant les coutumes, l'origine et l'historique de ces lieux célèbres disséminés partout au Japon.

Au VI<sup>ème</sup> siècle, avec l'arrivée du Bouddhisme, les pèlerinages devinrent une coutume répandue et un grand nombre de guides, tels que «Trente-trois sites par Saikoku» et «Trente-trois sites par Bando», ont été publiés à l'usage des pèlerins depuis le XII<sup>ème</sup> siècle. Les archives montrent que des multitudes de personnes, qu'elles soient riches ou pauvres, se sont rendues sur ces sites dès le XII<sup>ème</sup> siècle.

Kanpaku Toyotomi Hideyoshi, l'homme qui avait réussi à diriger la nation japonaise à la fin du XVI<sup>ème</sup> siècle, effectua une excursion célèbre à Yoshino et Daigo pour y admirer les cerisiers en fleurs, ce qui symbolisa le début d'une nouvelle ère, à partir de laquelle de telles activités ne revêtaient plus autant d'importance religieuse. Au XVII<sup>ème</sup> siècle, le pays ne connaissait aucun conflit sous le règne de Tokugawa Bakufu (qui dirigeait un gouvernement militaire essentiellement constitué de membres de la classe des Samouraï) et de plus en plus de monde visitait ces sites réputés. A partir du milieu du XVII<sup>ème</sup> siècle, une quantité importante de nouveaux guides et de relevés topographiques fut publié à Kyo (Kyoto), Osaka (siège de l'ancien gouvernement) et Edo (siège du nouveau gouvernement, actuellement connu sous le nom de Tokyo). A la fin du XVIII<sup>ème</sup> siècle, le guide illustré «Meisho-Zue» fut publié. Au fil des années, les sites de Miyajima (ou Itsukushima) d'Aki (moitié occidentale de la Préfecture actuelle d'Hiroshima), Amano-Hashidata de Tango (région nord de Kyoto) et Matsushima de Rikuzen (qui recouvre une grande région de la Préfecture de Miyagi et une partie de la Préfecture d'Iwate) furent appelés «Nihon San-Kei», les trois plus beaux paysages du Japon.

Kyoto, Osaka et Nara comptaient de nombreux lieux d'excursion, aussi bien intra-muros qu'aux alentours. Lorsque la population d'Edo atteignit un million d'habitants au XVIII<sup>ème</sup> siècle, le Bakufu transforma Asukayama, alors situé à la périphérie d'Edo et actuellement appelé Kita à Tokyo en site d'excursion permettant aux petites gens d'aller voir les cerisiers en fleurs. Le site fut ouvert en 1733 ; il s'agit du premier parc japonais géré par le gouvernement, avant l'ouverture de parcs à l'européenne créés à l'époque du «gouvernement éclairé» de Meiji.

TSUBOI KIYOTARI

## HISTORY OF PARKS AND TOURISM IN JAPAN

It can be found in historical documents of Japan that at the end of the 6th century (596 AD) prince Shotoku (Sessho, i.e., Regent) travelled as far as 500 km from Nara to visit a hot spring and established a stone monument there (the current Dohgo Spa of Ehime Prefecture). Evidence like this makes it clear that the Japanese fondness for hot springs dates back to ancient times. But there were also many other famous scenic spots in Japan to view the cherry blossoms of early spring and the reddened maple leaves of autumn. Man'yoshu, the oldest anthology of Japanese literature, refers to many of these famous sites. Since its publication in the 8th century, these sites have been the subject of 'Waka' (a traditional form of Japanese poetry with 31 syllables) from generation to generation. Now, these places are well-known as 'nadokoro' (famous scenic attraction) of 'utamakura' (famous places often referred to by Waka). Finally, Medieval times saw the publication of 'Meisho-ki', an excursion guide for Waka poets which explained the customs, origin and history of these famous places in every region of Japan.

In the 6th century, with the coming of Buddhism, pilgrimages became a popular custom, and numerous guidebooks for pilgrims have been published since the 12th century. «Saikoku Thirty-Three Areas Tour» and «Bando Thirty-Three Areas Tour» are typical examples of these pilgrimages. Historical documents show that many people, rich or poor, toured these areas as early as the 12th century.

Kanpaku Toyotomi Hideyoshi, the man who succeeded in ruling the nation at the end of the 16th century, took a famous excursion to view cherry blossoms at Yoshino and Daigo, which symbolized the beginning of a new era where little religious significance was attached to such activities. In the 17th century, peace reigned throughout the land with the rule of Tokugawa Bafuku (military government principally composed of members of the Samurai class), and the number of people visiting famous sites increased everywhere. From the middle of that century, an abundance of new wood-print guides and topographies were published in Kyo (Kyoto), Osaka (the center of the former government) and Edo (the center of the new government, and the current Tokyo). In the latter part of the 18th century an illustrated guide of famous places featuring many landscapes, 'Meisho-Zue', was first published. Over time, Miyajima (alias Itsukushima) of Aki (the west half of the current Hiroshima Prefecture), Amano-Hashidate of Tango (the northern region of Kyoto), and Matsushima of Rikuzen (a large part of the current Miyagi Prefecture and part of Iwate Prefecture), came to be called 'Nihon San-Kei', the three most beautiful landscapes in Japan. In Kyoto, Osaka and Nara, there were many excursion sites both within and outside of the cities. When the population of Edo reached one-million in the 18th century, the Bakufu transformed Asukayama (the current Kita ward of Tokyo Metropolitan City), located in the suburbs of Edo into an excursion site which allowed the ordinary people to visit and enjoy viewing the cherry blossoms. Opened in 1733, it was the first government administered park in Japan, preceding the introduction of European style parks that were created through the Meiji restoration.

TSUBOI KIYOTARI

# ICOMOS International Wood Committee

Committee meeting in Himeji City, Japan, 12 March 1994

## Resolutions

1. ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 wants to express its deep appreciation of the extraordinary generosity and efficiency of the Japanese National Committee of ICOMOS in the practical organization of the Symposium.

The Symposium provided the members of IWC with a deeper insight into and appreciation of the approaches to and problems of the conservation of timber structures in Japan and the realization of the common threads in our joint experiences.

2. ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 supports the continued efforts of UNESCO and ICOMOS towards the preservation of the integrity of *Kizhi Pogost* World Heritage Site in Karelia autonomous republic, Russian Federation.



IWC supports the recommendations of the ICOMOS mission of July and August 1993.

3. Following the resolution passed at its 8th International Symposium and Meeting in Nepal in 1992, ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 supports the continued efforts of UNESCO and ICOMOS towards the preservation of the integrity of the Kathmandu Valley World Heritage Site.

IWC further supports the recommendations of the joint UNESCO / ICOMOS Review Mission of November 1993.

4. ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 recognizes the strong efforts made by the Himeji city authorities to integrate concern for the importance of maintaining the integrity of the residential quarters in the Buffer Zone surrounding the Himeji Castle World Heritage Site within management approaches to the site, and recommends further consideration of these valuable quarters in all planning activity related to the site and its surroundings.

5. ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 commends the existing work of the authorities of Japan in compiling inventories of the traditional timber houses and buildings as an integral part of the historic fabric of the country's built environment, and welcomes an extension of this work with a view to the future preservation of these heritage resources.

6. ICOMOS International Wood Committee (IWC) gathered at its 9th International Symposium and Meeting in Japan in 1994 wishes to express its appreciation to the Committee's President and Secretary General for their hard work in organizing the 9th Symposium and the Committee's other business since the last Committee meeting in 1992.

# Standards for the Protection of Historic Timber Buildings

## 2nd Draft, May 1994

The aim of these Standards is to define basic and universally applicable principles and practices for the protection and the preservation (conservation) of the cultural significance of historic timber buildings.

### The Standards

- *recognize* the importance of timber buildings from all periods for the world cultural heritage;
- *consider* the great variety of timber structures in the world;
- *consider* the various species of wood used to build these structures and the differing rates of decay of wood due to varying climatic conditions;
- *consider* the great variety of actions and treatments required for the preservation (conservation) of these heritage resources;
- *recognize* that buildings partly or wholly of timber construction have special problems owing to the risk of rapid degradation as a consequence of fluctuations in humidity, fungal decay, insect attack, or fire;
- *recognize* the scarcity of original buildings due to vulnerability and the loss of historic technical knowledge concerning design and construction;
- *note* the Venice Charter and related UNESCO and ICOMOS doctrine, and seeks to apply these general principles to the protection of historic timber buildings.

#### 1. General issues

The Standards adopt the following basic principles which are applicable to any historic building regardless of type or building material:

#### MAINTENANCE

- 1.1 Continuous maintenance is crucial for the protection of the cultural values of historic buildings.

#### INTERVENTIONS

- 1.2 Any intervention must be governed by unswerving respect for the aesthetical and historical values, and the physical integrity of cultural property.
- 1.3 Any proposed intervention should:
  - a) be reversible, if technically possible; or
  - b) at least not prejudice a future intervention whenever this may become necessary.
- 1.4 It must be recognized that some problems are unique and have to be solved from first principles on a case by case basis.

#### DOCUMENTATION

- 1.5 The condition of the building before any intervention and all materials used during treatment must be fully documented in accordance with Article 16 of the Venice Charter.

#### EDUCATION AND TRAINING

- 1.6 Comprehensive and integrated training programs on national and international levels should be established. The programs should include all relevant professions and trades involved in preservation (conservation) work, and in particular architects, conservators, and craftsmen.

#### 2. Particular issues related to historic timber buildings

#### INTERVENTIONS

- 2.1 The least possible intervention in the fabric of historic timber buildings is the ideal.

However, depending on traditions or on particular structural requirements, preservation (conservation) work on a timber building may be carried out by dismantling, followed by repair or replacement of individual members, and subsequent reassembly.

- 2.2 During interventions, all material, including in-fill panels and weather-boarding, and roofing and flooring materials should be regarded as being as important as the structure itself. The protection should also include surface finishes such as plaster, paint, coating, wall-paper, etc.

#### REPAIR AND REPLACEMENT

- 2.3 In principle, as much as possible of existing material should be retained. However, restoration – the process of making changes to a historic building so that it will closely approximate its state at a specific time in history – should be accepted under certain circumstances and conditions according to the principles outlined in the Venice Charter Article 11. It is desirable that members which are removed from the building are catalogued and that characteristic samples of members are put in permanent storage.
- 2.4 Replacement timber should be accepted where this is an appropriate response to the conservation of the aesthetic and historical value of the cultural heritage.

Replacement timber of appropriate moisture content and other characteristics of appropriate compatibility shall be used when members or parts of members must be replaced due to decay or damage.

Members being replaced. Where possible, this should also include similar natural characteristics, such as knots,

Where restoration is the goal, new members should be dressed with similar tools or machines as were used originally. The same techniques of craftsmanship and construction should be employed.

If a part of a member is replaced, traditional woodwork joints should, if appropriate and compatible with structural requirements, be used to splice the new and the existing part.

2.5 It must be accepted that new members or parts of members will be distinguishable from the existing ones. To copy the natural decay and deformation of the existing members is not desirable. Appropriate traditional or well-tested modern methods (which should not degrade the surface of wooden members) may be used to match the coloring of the old and the new.

2.6 New members or parts of members should be discretely marked by carving, or by marks burnt into the wood, or other methods, so that they can be identified later.

«HISTORIC FOREST RESERVES»

2.7 All countries should be encouraged to establish historic forest or woodland reserves where appropriate timber can be obtained, on a selective basis, for the preservation (conservation) of historic timber buildings.

Institutions responsible for historic preservation should establish or encourage the establishment of stores of timber appropriate for preservation (conservation) work.

CONTEMPORARY MATERIALS AND TECHNOLOGIES

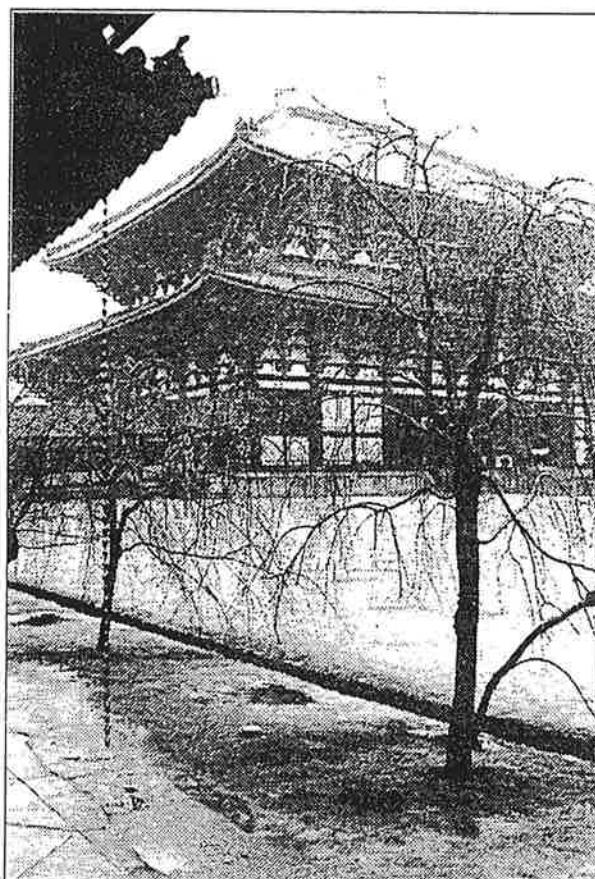
2.8 Contemporary materials, like epoxy resins, and techniques like structural steel reinforcement, should be used with the greatest caution, and only in cases where the durability and structural behavior of the materials and construction techniques have been satisfactorily proven.

2.9 The use of chemical preservatives should be carefully controlled and should be used only where

there is a clear benefit, where public safety will not be affected, and where the likelihood of success over the long term is significant.

The revisions included in this 2nd draft of the IWC document on preservation (conservation) principles are based on:

- 1 Discussions during the ICOMOS International Wood Committee meeting in *The Japan Castle Research Center* in Himeji city, Japan, on 11 and 12 March 1994 (please see the attached List of participants).
- 2 Comments received from Committee members prior to the meeting:  
*Panu Kaila, Finland*  
*Walter Liese, Germany*  
*Andrew Powter, Canada*  
*Hala Fouad Youssef, Egypt*
- 3 Participants in ICCROM's ARC 94 course (*J. Lehtinen, S. Yamato, M. Berker*).
- 4 Comments by  
*Scott Newman, Canada*  
*John Ward, Canada*





INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES  
 CONSEIL INTERNATIONAL DES MONUMENTS ET DES SITES  
 CONSEJO INTERNACIONAL DE MONUMENTOS Y SITIOS  
 МЕЖДУНАРОДНЫЙ СОВЕТ ПО ВОПРОСАМ ПАМЯТНИКОВ И ДОСТОПРИМЕЧАТЕЛЬНЫХ МЕСТ

Nara Royal Hotel  
 9<sup>th</sup> November '94

Kigotari Tsuboi Esq.,

Chairman

ICOMOS (Japan)

Nara, Japan.

Dear Mr. Tsuboi,

This is to thank you and ICOMOS (Japan) for your very kind hospitality and goodwill in hosting the Advisory and Executive Meetings in Nara. We had long wanted to visit Japan and hold some of our scheduled meetings in your fine country. We have at last succeeded.

With warm personal regards,  
 Yours very sincerely,

Edmond Sibo  
 President, ICOMOS